

報告 1

「日中物流サービスシンポジウム」

5月28日から6月1日まで、北京の国家会議センターで「第2回北京国際サービス交易会」が開催されている。この交易会は商品の売買を中心とした中国で一番古い歴史のある交易会「広州交易会（中国輸出入商品交易会）」に並ぶ国家級国際交易会として昨年からは始まったサービス産業専門の交易会であり、今回で2回目の開催となる。本交易会には情報通信、建築、金融、旅行、娯楽などのサービス産業関連企業が世界中から参加出展しており、今後、更なる成長が見込まれる中国のサービス産業に世界中が注目していることがうかがえる。

一般的に経済発展が進むと、成長の伸びが第一次産業、二次産業から第三次産業であるサービス産業に移っていき、それに従い、GDP構成比もサービス産業が主となると言われている。アメリカ、日本などの先進国ではGDPに占めるサービス産業の割合が70%以上を占めている。一方、中国は急速に経済発展したものの、GDPに占めるサービス産業の割合は2010年時点で43.1%であり、今後、成長の拡大余地が大きいと言えるだろう。中国政府も、中国が引き続き経済発展していくためにはサービス産業の成長が必要不可欠であることを理解しており、特に中国の場合、都市化、高齢化、環境保全といった、サービス産業が貢献できる課題が多い。

本交易会に、日本からは日本貿易振興機構（JETRO）がジャパンパビリオンを出展し、日本のサービス関連企業が多数参加している。また、交易会に合わせ、5月28日に「日中物流サービスシンポジウム」がJETROの主催で開催され、木寺昌人在中国日本国大使館特命全権大使が来賓挨拶を述べ、日本通運株式会社渡邊健二代表取締役社長が「物流事業の変遷と日本通運の取り組み」と題した講演を行い、また、ヤマトホールディングズ株式会社瀬戸薫代表取締役社長が「サービス産業の発展と流通の重要性について」と題した講演を行った。

本講演を通して感じたのは、日本のサービス産業の強みは「現場発想の革新性」「従業員の質の高さ」「きめこまやかなおもてなし精神」である。例えば、日本では当たり前となっている宅配便の時間帯指定や冷蔵・冷凍の宅配、ゴルフ・スキー用具の宅配などは、どれも現場の声を反映して創出された革新的なサービスとのこと。これら現場発想の革新的なサービスは従業員一人一人のモチベーションの高さ、仕事に対する情熱・意識の高さが必要不可欠であり、その根底にはきめこまやかなおもてなし精神がある。

おもてなし精神に基づいた日本流サービスを中国で展開することは、日本にとってだけでなく、中国にとってもプラスであり、今後の日中交流の拡大を促し、双方 Win-Win の関係を築く事ができるだろう。（笠原）



講演Ⅰ 日本通運株式会社



講演Ⅱ ヤマトホールディングズ株式会社

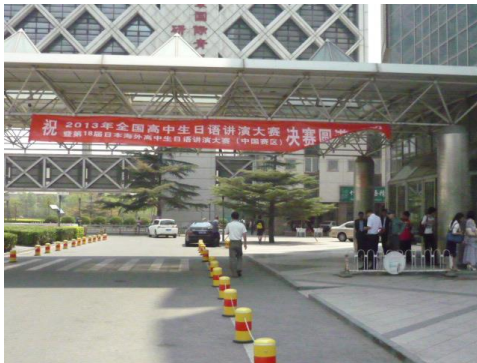
第4回全国高校生日本語スピーチコンテスト北京決勝大会が5月25日、朝陽区の世紀劇場で開かれました。主催は中日青年交流中心と特定非営利活動法人エデュケーション ガーディアンシップ グループ。中国で日本語を学ぶ34校68名の高校生たちが国内4地区(瀋陽、天津、上海、長沙)に分かれ地区大会に参加し、そこで優秀な成績を収めた21人が北京の決勝大会に進みました。

開会式の中で中国側の主催者代表は、「コンテストを通じ日本を理解し、社会や文化を知り、アジア・世界の安定に尽くしてほしい」とあいさつしました。また来賓を代表し、日本大使館 三上正裕公使は「この決勝に出ることがすでにすごいこと。両国の関係が難しい頃だからこそコミュニケーションが大切」と参加者を励ましました。

テーマは「夢、空想ではない」。21名の夢が審査員と大勢の観客の前で語られました。日本語教師、ソフトウェア開発者、通訳者、服飾デザイナー、獣医、外交官等将来になりたい職業から、世界平和や日本訪問、動物保護を願ったりするなど発表者の夢は様々です。小さい頃の憧れから今の夢へと変わり、今はそれに向かい一步一步近づいている途中。大切なことは努力と多くが語り、また鑑真和尚に触れる参加者が数人いたのが印象的です。そしてどの参加者からも日本に対する強い親近感が感じられました。

ステージでの出し物の後、審査結果が発表され、二人が1位を受賞しました。昨年9月自分を日本に招待してくれた老人との交流を紹介した杜雨萌さん(済南)と映画製作という夢が空想になってしまったけれども、演劇の公演をまかせられうまく上演でき自信につながったことを紹介した楊亦沈さん(上海)です。彼女たちは7月、川崎市で開催される国際大会に出場する予定です。

このスピーチコンテストは、日中双方の企業から支援を受け開かれたものです。21名の弁論を聞きながら、高校生にこのような機会を提供し、それぞれの夢の実現を見守ろうとする主催者、協賛企業の活動は決して無駄にはならないだろうと思いました。(近藤)



会場の外に掲出された横断幕



月壇中学の日本語寸劇「パンダ旅館」



大会出場者と関係者の記念撮影

成長率 7.7%で楽観論と悲観論

2013年第1四半期の成長率が発表された。7.7%だった。この数字を巡って議論が巻き起こっている。

2012年は中国経済が七転八倒した年だった。世界経済がなかなか立ち直れず、特に先進国の欧米日の経済が減速乃至足踏みする中で、外需型成長にどっぷりと浸かっている中国経済はもろに影響を受け、減速した。2011年から減速が始まり、それは2012年に入っても止まらなかった。12年の第3四半期には7.4%まで落ち込んだ。しかし、第4四半期で7.9%と持ち直し、各経済指標が上向いてきた。中国経済は12年第3四半期が底で徐々に回復基調に乗るとというのが大方の見方となった。中国の経済学者も、世界の主な経済機構も13年の第1四半期は確実に8%の大台に乗ると予測した。ところが蓋を開けてみると7.7%と、12年の第4四半期より後退したのである。幾つかの国際格付け機関、例えばムーディーズ・インベスターズ・サービス、フィッチ・レーディングスはこの数字が出た後、中国のランク、あるいは評価を下げた。このことも悲観論に拍車をかける結果となった。

悲観論の主な論拠は、政治の壁(一党独裁体制が経済成長の足を引っ張る)、格差の拡大、幹部の腐敗による国民の不満、実体経済の深刻さ、日中関係の悪化などを挙げる。政治、外交問題はここでは触れないが、格付け機関が中国経済のランク、評価を下げたのは、主として地方政府の「隠れ借金」問題だ。中国政府の発表では、公的債務(中央・地方政府の債務)は対GDP比15%の7兆7600億元だ。これに対し、IMF(国際通貨基金)は同22%、11兆3800億元程度と見ている。

問題は中国の政府や各種金融機関もこの「隠れ借金」を深刻視していることだ。中国の「審計署」(会計検査院)の試算では10兆7000億元、中国の招商証券の試算では15兆元、また元財務部長(大臣)の項懷誠氏の試算では20兆元にはなると言う。資金不足に悩む地方政府は、窮余の策として「融資平台」(プラットフォーム)を設立し、高利で資金調達を行い、開発、インフラ整備を行っている。例えば地方政府管理の国有地を業者に開発させ、そこに住宅や、リゾート施設を造り、その利益で開発費を返済する。上手くゆけば良いが、失敗すると債務が膨らむ。多くの場合は金利が10%—11%と高利だ。なお、地方政府は例外的な場合を除き、地方債を発行することはできない仕組みになっている。この部分の債務が膨らんでいると言われる。そしてこの債務は中央政府発表の「公的債務」にはカウントされていない。これらを勘案すると公的債務は対GDP比15%と発表されているが、実際には50%—60%の可能性もある。そうだとすると、少なくとも現時点では中国の公的債務は正常だ。大体60%以内なら許容範囲内と言われる。日本の236%、米国の107%に比べれば、そう深刻な問題ではない。ただこれが膨らみ続ければ、中国経済を圧迫する可能性がある。

楽観論者は非常に冷静だ。7.7%成長の数字を発表した国家統計局の盛来運報道官は、「7.4%—7.9%の間なら、安定成長の範囲である」と述べた。李克強首相も7.7%の数字が出た後、「経済は全体として良好で、成長速度は合理的である」と述べている。また習近平国家主席は、「(無理すれば)成長を早めることはできるが、我々はやらない」と述べている。

幾つかの重要経済指標が好転していることも楽観論の根拠だ。貿易、特に輸入だが、今年の第1四半期は輸出が18.4%と二桁の伸び、輸入は同8.4%で貿易収支は430

億ドルの黒字だった。このところ低迷していた新車販売も13年4月は189万9400台と対前年同月比15.3%だった。心配なのは日中貿易で、第1四半期はマイナス10%だった。日本からでないと調達できない高級素材や部品が入りにくくなったのは、中国経済にとって痛手だ。

内陸部のインフラ整備は着々と進み、近い将来大きな経済効果が期待できるというのも楽観論の根拠だ。内陸部農民の所得を向上させ、格差問題の緩和を図る決め手となるとされている、内陸部農村の「都市化」も進んでいる。改革・開放が始まった30数年前の都市住民と農民の人口比は25%対75%だった。それが12年末には逆転し、都市住民51%、農民49%となった。

もちろん内需の掘り起しがまだ不十分なのは、誰も否定しない。だがGDPにおける内需の比率が少しずつ大きくなっているのは事実だ。中国経済が内需型成長から外需型成長に変質してから、GDPにおける内需の貢献度は4割程度まで落ちた。因みに米国は同7割、日本は6割程度だ。ところが、12年末の時点で中国のGDPに対する内需の貢献度は51.8%まで上昇した。

楽観論者は、昨年の党大会で打ち出した、2020年の実質GDPと国民所得を2010年の2倍にするという計画も、内需掘り起しには有利だと主張する。将来に希望を持って人々は消費に走るからだ。また一人っ子世代が社会の中核を占めるようになりつつあるが、この世代は消費意欲が旺盛で、消費により豊かさと利便性を追求する傾向がある。この世代を中心に2015年頃には第3次消費ブームのピークが来ると言われる。この中には本格的な中国人の海外旅行ブームが含まれている。先ごろ海南省で開かれた「ボーアオ・フォーラム」で、習近平主席は次のように述べた。「向こう5年間で、中国は輸入額10兆ドル、海外投資額5000億ドル、中国人の海外旅行延べ人数は4億人にする」。

米国経済復活の兆し、日本経済のデフレ脱却傾向も楽観論者の論拠となっている。国際機関の見方も比較的冷静で、おおむね2013年の中国経済は通年で8%台の成長を実現すると予測している。第2四半期の数字がどうなるか注目するところである。

いずれにせよ、中国経済が悲観論的要素と楽観論的要素を合わせ持っていることは事実だろう。その意味で習近平、李克強体制の経済運営能力が問われている。

【筆者プロフィール】

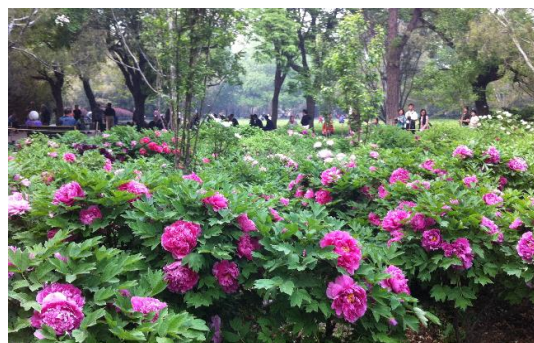
西園寺 一晃（さいおんじ かずてる）氏
1944年生まれ

- 明治の元勳・公爵・首相・枢密院議長である西園寺公望氏を曾祖父に持つ。
- 西園寺公一（きんかず）氏（第一回参議院議員・日中文化交流協会常任理事）の長男。
- 北京大学経済学部卒業
- 朝日新聞社に在籍中は、日中関係の調査研究室長などを歴任。退職後も中国問題の調査、研究にあたる。
- 現在工学院大学客員教授、北京大学客員教授、伝媒大学客員教授、北京城市大学客員教授

北京スタッフ便り

皆が知っている北京と知らない北京の表情

樹木が緑に茂り、牡丹、バラなどさまざまな花が咲き競い、熱くも寒くもない北京の5月。一年の中で心地よい時期の一つです。休みの日を利用して、山に登ったり、公園を散歩したりして、大自然を楽しむことは、平日の仕事の疲れを取るいい方法でしょう。



紫竹院公園の牡丹

外国からの観光客にとって、故宮、頤和園、万里の長城という名所は北京観光に欠かせない存在ですが、中国国内の観光客にとって、天安門広場、毛沢東紀念堂、後海の胡同(細い路地)と四合院(何世帯か共同で住む北京の伝統的家屋)は必ず行くところです。ゆっくり観光する時間がない場合、ただ北京の繁栄とシンボル、北京の伝統と現代的な風貌だけを見なければ、長安街に沿って東の国貿から西の公主墳まで行けば十分です。



鮮明な対照となる天安門と胡同

北京は天安門を中心として建物が東西対称になるように計画されていて、長安街は北京を南北に分ける大通りです。東から西へ行くと、まずは近年、速いスピードで発展してきた高層ビル街、国貿(中国国際貿易中心の略称)エリアであり、CBD(Central Business District)とも言われています。特に2008年に竣工された国貿大廈は高さ330メートルで現在の北京で最も高い建物です。このエリアは、多くの外国企業のオフィス、欧州ブランド品の専門店が集中的にあるため、ここで働く職員は北京では収入が最も高い「高級ホワイト・カラー」といううわさがあります。建国門を過ぎると、北側には交通運輸部、香港長江実業グループの創始者李嘉誠が投資した東方広場商業共同ビル、南側には中国税関総署、商務部等建物があります。さらに西へ行くと、北側には故宮(紫禁城)、中央政府の所在地である中南海、南側には中国国家博物館、天安門広場、人民大会堂というランドマーク、国のシンボルとも言える建物があります。次は西単から復興門までの金融街エリア。中央銀行、国有銀行、商業銀行、外資銀行の中国事務所等がほとんどこのエリアに立地しています。復興門を過ぎると、軍事エリアに入ります。中央軍事委員会、海軍本部等警備が厳しく、一般人が近づいてはいけない建物がいくつかあります。話によると、長安街は最初、東単—西単の間3700メートルの大通りを指しますが、その後、建国門—復興門の間の6700メートルを、現在、東の通州区と西の石景山区の間の42000メートルを指すようになりました。北京地下鉄一号線が長安街の地下を走っています。

しかし、これらは観光客がよく知っている北京の表情ですが、北京で長く暮らしている人たちにとって、国貿が象徴する経済の繁栄、紫禁城や中南海が象徴する権力、金融街が



海淀区ある住宅区周辺の屋台

象徴する富等はあまり日常生活に係りがありません。高級マンションを手に入れられない彼らは、騒がしい市場で野菜や食べ物を買ったり、夏になると、蠅がよく近づく屋台で平気でビールを飲んだり、串焼きを食べたりして、楽しそうに暮らしています。観光客にとって、こんなところへは見に行くに値しないかもしれませんが、他人と違うところへ行くことで、他人が知らない北京の表情を分かるものです。(鞠)